

喜び、花を咲かせよ

奨励	今井 秀夏〔いまい・すは〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

荒野よ、荒地よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
野ばらの花を一面に咲かせよ。
花を咲かせ
大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ
カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

弱った手に力を込め
よろめく膝を強くせよ。
心おののく人々に言え。
「雄々しくあれ、恐れるな。
見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。
神は来て、あなたたちを救われる。」

（イザヤ書 35章1―4節）

希望の訪れ

この聖書箇所 の1 節と2 節には大自然が歌われています。読むだけでも輝かしいお花畑が目の前に現れ、花にあふれるカルメルとシャロンの景色が見えてくるような気がします。3 節と4 節では、人々が主役になっています。この人々は「解放された人々」であり、「主に贖（あがな）われた人々」だと、3 5 章の終わりの1 0 節には示されています。荒地が「喜び躍」るのも、砂漠が「喜び、花を咲かせ」るのも、すべてこの人々ゆえなのです。

イザヤは、さらに「その時、砂漠に大路が敷かれ、この人々はその大路を進み、喜び歌いつつシオンに帰る」と歌っています。「その時」とは、敵を打ち、悪に報いる神が来られる時であり、神が来てその人々を救われる時なのです。人々は、砂漠の中に主の栄光が与えられ、神の輝きに満たされるのを見るのです。このようにイザヤは、希望に満ちた預言を美しい言葉で語っています。

人が人として生きてゆくためには、その心に希望があり、手足には力が必要です。手は人のアイデアを現実のものとして創ることができ、足は、その手が創り上げようとしていることを可能にする行動力をもっています。しかし、心が挫けてしまった人は、花を咲かせることができない砂漠のようなものかもしれません。

苦難の生涯

私はここで一人の韓国女人性のお話をしたいと思います。彼女は1 9 9 7 年の終わりにソウルで亡くなりました。彼女の晩年をよく知る私は、その人が天に迎えられたと信じています。

その人の名前はキム・ハクスン（金学順）（写真(1)）。ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、第二次大戦中、日本軍の従軍慰安婦として中国に連れて行かれました。1 9 9 1 年、6 7 歳になって、そのことを初めて公表した人です。

ここに、彼女が自分の心境を語った証言テープの一部をご紹介します。新聞記事としてネット上でも検索できる内容です。

「ずっと逃げたいと思っていました。そんなある夜、私の部屋に、男の人が忍び込んできました。びっくりしましたが、その人は『私も朝鮮人で寝るところがなくて来た』と言いました。両替商をしているという、その人に助けてくれるように頼み、一緒に逃げました。他の人まで連れて行くような余裕はありませんでした。その年の秋のことでした」

「南京、蘇州などを経て上海へ行き、その人と夫婦になりました。質屋をやり、娘と息子が生まれました。1 9 4 6 年の夏に、船で仁川へ戻り、ソウルの難民収容所に入りました。そこで娘が死にました。そのあと、ソウルで部屋を借り、私はノリ売りの商売を始め、夫は掃除夫になりました」

「夫は酒を飲むと、『お前が慰安所にいたのを助けてやったではないか』と言って、私を苦しめました。その夫も朝鮮戦争の動乱の中で死に、息子を育てながら、行商しながら生活していました。しかし、その息子も小学校4 年の時に水死しました」

「生きていこうという気持ちもなくなりました。死ぬことしか考えませんでした。全羅道（チョルラド）、慶尚道（キョンサンド）、済州島（チェジュド）など全国を転々とししました。酒やたばこをやり、人生を放棄したような生活を続けていました。10 年ぐらゐ前に、これじゃだめだと思い始めました。ソウルに来ました。家政婦をやったお金で、小さな部屋を借りています。私の不幸は慰安所に足を踏み入れてから始まったのです。この恨みをどこにぶつけようか。だれにも言えず苦しんでいました。今は月に米10 キロと3 万ウォン（約5 2 0 0 円）の生活保護を貰っています」

「いくらお金をもらっても、捨てられてしまったこのからだ、取り返しがつきません」

（1 9 9 1 年1 2 月2 5 日付 朝刊『朝日新聞』）

こういう状態の中で、1 9 9 1 年1 2 月キム・ハクスンさんたちによる日本国に対する提訴が東京地裁に提出されました。そして、朝日新聞の1 9 9 2 年1 月1 1 日付けの関連記事によって日本中に知れ渡りました。

1 9 9 2 年1 月には日韓首脳会談が行われ、1 9 9 2 年6 月にはキム・ハクスンさんのソウル市での街頭演説が行われ、1 9 9 3 年には河野談話へと動きが加速していったのです。

神の愛と魂の平安

私が日本から韓国に戻り、ソウルのある教会に伝道師として奉職し、日本の教会関連の仕事を担当し始めたのは1 9 9 5 年3 月でした。私の知る限り、韓国の教会は政治的なかわりを避けようとしたことだったのか、目立ってこの問題に介入しようとはしていなかったようでした。むしろキリスト教会系は日本での動きが目立ち、1 9 9 6 年夏には日本のある教会の牧師、長老が、韓国教会を通してキム・ハクスンと会って、謝罪するために訪韓しました。

その折に、私が案内、通訳を引き受けました。秋には、日本イエス・キリスト教団の本田弘慈牧師も私たちの教会のリバイバル聖会の講師として来韓した折に、私が招いたキム・ハクスンに謝罪をし、按手して癒しの祈りを捧げたことを思い出します。喘息の発作が起こるので、長時間遠出をすることはできないと断っていた彼女が教会を訪れたことは、まるで奇跡のようでした。彼女の心に、どのような事があったのかをこの時には話し合うことはありませんでした。

この年の終わりには、私は教会での働きを辞めておりましたが、韓国での滞在は続きました。翌年の1 9 9 7 年の夏ごろに彼女の安否を尋ねたところ、病院に入院していることを知り面会に行きましたが、体調不良で会うことは叶いませんでした。その後の1 0 月の終わりの日に、彼女を見舞うために兵庫県の牧師が来韓し病院に案内をしましたが、病院から面会の許可が下りず、会えずに帰りました。その折に、日本の教会の婦人会が手編みで作ったショールを病院の方にこつづけました。

数日後に私が病院を訪ねた時には、幸いにほんの少しの間の面会時間をもつことができました。その時彼女は、日本から送られてきたショールを羽織っていました。以前の彼女の暗く硬い表情とは打って変わって、穏やかで柔らかい表情で出てきました。そして、彼女は私にこう言いました。「私はもう日本を赦さなければならないと思います」。

その時の彼女の心の中は、重荷を下ろし、長い間の苦しみから解放された平安と喜びに満たされているに違いない、と私は思いました。もともと彼女は美人でしたが、その時の彼女の顔は以前の美しさが甦ったように輝いていました。その約1 カ月後、彼女は天に召されました。

このことは、第二次世界大戦と朝鮮戦争という二つの大きな戦争に巻き込まれ、抗う術もない大きな流れに翻弄され、人生を台無しにされて生きた一人の女性の歴史です。でも、政治を離れ人間としての純粋な慰めによって、キム・ハクスンの心は晴れ、「赦すこと」、「受け容れる意思」が生まれてきたのではないかと思います。まさに砂漠のようだった彼女の心は、花を咲かせることのできる、潤いに満ちた園になったのです。彼女は臨終の時、神の包み込む愛、限りない憐み、祝福の恵みを受けて、喜びと平安に満ちて天に召された、と私は信じています。

今また、慰安婦の問題が大きくなっています。二国間の政治問題・外交問題には私は何のかかわりもありますが、問題の渦中にある元慰安婦たちのためには、祈らざるを得ません。キム・ハクスンさんの場合のように、誰かが、愛をもって彼女らの恨みを溶かし、彼女たち一人ひとりが、平安に包まれて、喜びのうちに余生を送ることができるようにと、私は祈っています。

2014年6月17日 今出川火曜チャペル・アワー「音楽礼拝奨励」記録

<HPでは写真等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 292号』をご覧ください。>